

## 一般調査報告書

### パリの観光ボランティア「Parisien d' un Jour」について

パリとその周辺の街を訪れる人の観光客数は年間4500万人。その6割が外国人であると言われていています。これは、もちろん、パリをはじめとするフランスが世界に誇る観光資源の数々、数々の世界遺産、たくさんの美術館・博物館、そして軒を連ねる華やかな高級ブランドのブティック、などに拠るところが大であると言えます。パリでいえば、ノートルダム大聖堂、サクレクール寺院、エッフェル塔、ルーブル美術館、そしてヴェルサイユ宮殿などが主な訪問先でしょうか。しかし、パリの魅力はそれに留まりません。19世紀半ばに整備された美しい街並みもそれ自体が世界遺産であり、立派な観光資源になっています。都市そのものが観光の対象となる「都市観光」の街として、パリはもっとも人気のある訪問先の一つです。地図を片手に細い路地を歩きまわる訪問者をもはや日常的とも言っていていくらい頻繁に見かけることがその証左でしょう。

この街並みの美しさを誇るパリは、同時に、たくさんの人が暮らす「生活都市」でもあります。多くの人がこの町で学び、働き、生活しています。もしかしたら、同じ空気を吸っていながらも、彼ら生活者は観光客とはちょっと違った次元で生活しているかもしれません。

そんなパリを生活者の視点から案内してくれるボランティア団体があります。2007年に設立された「Parisien d' un Jour（「一日パリジャン」）」です。この団体は、観光地としてではなく、多くの人が生活する街としてのパリを紹介しており、訪問者と一緒にパリの街を歩きながら、その歴史と現在について語ってくれます。

今回の報告書では、この Parisien d' un Jour を取り上げ、いわゆる観光ボランティアでありながらも、生活者の視点からパリを案内してくれる彼らの活動を紹介したいと思います。

※ ちなみに、フランスは年間約7,900万人(2010年)の訪問者を受け入れる世界一の観光大国です。(フランスの人口は約6,260万人なので、人口以上の訪問者を受け入れています。)この世界一の観光業が経済に占める割合も他の国を抜きんでており、フランスの観光業はフランス第1位の経済セクターであり、直接雇用だけでも100万人、間接雇用でさらに100万人の雇用を生み出しています。また、観光関連の売上高は490億 US ドルに達し、フランスの GDP の6.3%を稼ぎ出しています。

※ 愛知県内にも50を超える観光案内ボランティア組織があります。

#### 1 「Parisien d' un Jour」の概要

「Parisien d'un Jour」は、およそ「一日パリジャン」くらいの意味です。もともとアメリカ・ニューヨークで始まった観光案内グループ「Greeters（グリーターズ：「歓迎する人」）」の活動をモデルにして2007年に結成されたもので、パリやその周辺の街を紹介するボランティアグループです。

原則としてボランティアによる「街案内」であり、無料です。(ただし、グループとしての活動を維持するために、寄付の呼び掛けを行っています。) このボランティア一人ひとりが Greeter (グリーター: 歓迎する人) と呼ばれ、申し込み1件について一人のグリーターが紹介されます。

2011年7月の時点で200人を超えるボランティアが登録しており、その年齢も幅広く、また職業も学生、サラリーマン、定年退職者など様々であるとのこと。観光案内に係る特段の資格や通訳に関する資格を持ってはいませんが、「本物の」パリジャンであるのは間違いないそうです。そして、その



彼ら自身が小さなエピソードや裏話などを交えながら、2から4時間をかけて生活者としての視点から自分の街を紹介してくれるのです。

2007年に発足してから彼らの活動は年々大きくなっており、2010年においては1500件3700人以上の訪問者を案内したそうです。訪問者の出身国は77にも及びますが、その大部分はアメリカ人だったとのこと。もちろん、ドイツ、カナダ、オーストラリア人などの訪問者からの申し込みもあったそうです。さらには地方からパリにやってくるフランス人からの申し込みもあったそうなので、その活動がフランス人自身にも受け入れられ、評価されていることが判ります。なお、障害者の受け入れにも積極的であり、登録ボランティアを対象に特に障害者を案内するための特別な研修も実施しているようです。

ちなみに、このグリーター活動は、パリの Parisien d'un Jour に限らず、リヨンやナント、ヴェルサイユ、さらにタルヌ地方や南仏プロヴァンスなど地方の小都市にも広がっているそうです。また、特にパリ市に隣接するサン・ドニ市では、行政もこの活動を支援しており、観光局のホームページから直接申し込むことができます。

## 2 グリーターによる街案内に参加して

実際に Parisien d'un Jour の街歩き案内サービスに申し込んでみました。今回は、行政活動を支援しているというサン・ドニ市でのグループの活動を見てみたかったので、サン・ドニ市観光局のホームページからのリンクで申し込むことにしました。(このリンクから申し込むと、自動的にサン・ドニ市での街歩きサービスを申し込むこととなります。また、サン・ドニ市に限らず、申し込みはインターネット上のみで可能になります。)

ホームページはフランス語の他に英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語が用意されています。トップページでグループの概要や活動内容が説明されています。申し込みにあたっての注意事項なども提示されています。

そして、申し込みのための記入ページを開きます。(申し込みはオンラインに限られています。) ここには、氏名、電話番号、出身国、パリでの滞在期間、希望日時(土曜日にしました)、希望言語(日本語を含む16の言語から選べます!)、参加人数(最大6人まで)などを入力する項目があり、さらに「商工業」「スポーツ」「都市・建築」「歴史」「アンティーク・蚤の市」「グルメ」「歴史」「庭園」「ショッピング・モード」などの選択肢

の中から関心のある項目を選ぶことができます。今回は、関心のある項目として「商工業」を選びました。この選択項目に応じて派遣されるボランティアが選ばれる一方で、特定のコースは提示されておらず、訪問先などを指定することもできません。ただし、自由に書き込める欄が用意されており、ここに自分の希望を書き込むことができます。（普段は不要ですが、今回は念のため、自分が日本の自治体職員であること、観光振興も業務の一つであることを自己紹介風書きこみました。）

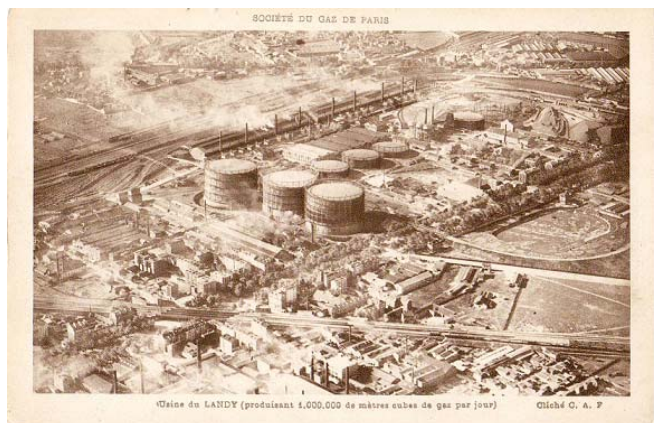
これらの項目を入力したのちに「提出」をクリックすると、数時間後に「申し込みを受け付けました」という旨のメールが届きます。さらにこのメール内にあるリンクをクリックすると、申込者あてに訪問先、当日一緒に歩いてくれるグリーターの氏名・携帯電話の番号などの情報が示されました。私たちについてくれるグリーターは、ジェヌヴィエーヴさんとのこと。また、訪問先についての提案もあり、かつてはヨーロッパ有数の工業地帯だったというサン・ドニ市の新市街地を案内する旨が書かれていました。この段階でさらに詳細な希望があれば、このグリーターに直接に相談することができます。今回は特に希望がなかったので、「提案を了承する」旨のアイコンをクリックし、申し込みを確定しました。その後、グリーターの方から直接にメールをいただき、集合場所などについてその後のメールの交換のなかで決定しました。さらに、その後いただいたメールで、ドイツ人のフリーライターがやはり Parisien d'un Jour の活動を紹介したいとのこと、私たちの街歩きに同行することを希望しているがどうか、との確認のメールがあり、もちろん了承しました。

そして、当日。待ち合わせ場所に時間きっかりに現れたジェヌヴィエーヴさん。ドイツ人フリーライターのブリジットさんともすぐに合流しました。簡単な自己紹介の後、ジェヌヴィエーヴさんから街歩きコースの説明がありました。私たちは街歩きのテーマに「商工業」を選択していたので、サン・ドニ市の商工業の歴史についておおよその説明をしていただきました。このなかで、20世紀はじめまでヨーロッパ有数の重工業地帯だったこと、資材搬入のために運河や鉄道が引かれていたこと、重工業が地方に移転した工場跡地が倉庫になり、さらに卸売市場になったこと、第二次世界大戦後に卸売市場が衰退した後にはテレビ・映画のスタジオがたくさんできたこと、などを説明していただき、おおよそのイメージをつかみます。

そして街歩きに出発します。古い倉



オリエンテーションの様子。右端がジェヌヴィエーヴさん。



1920年頃のサン・ドニ市の様子。当時は欧州有数の工業地帯でした。

庫群、昔の鉄道跡、使われることなくただ水を湛えている運河、戦後にできたというスタジオの巨大建築物群などを見ていきます。歩きながら一つひとつを丁寧に説明していただき、時折、古い写真を出して往時を想像する手助けをしてくれます。もちろん、この説明に対して自由に質問することができます。さらに世間話も混じり、このなかでジュヌヴィエーヴさんがサン・ドニ市に24年間住んでいること、この24年間の間にサン・ドニ市は大きく姿を変えてきたこと、などが語られました。まさに、住民自らが自分の街を説明している観があり、大きな親しみが感じられました。

また、現在、空港に直結する高速道路となっている半地下式の道路は、かつて「サン・ドニのシャンゼリゼ」と呼ばれる繁華街だったとのことで、空港に行く時に必ず通っていながら特に意識することがなかった道路の「歴史」を知り、驚きました。

そして、この散策のなかで、グリーターとしてのジュヌヴィエーヴさん自身についてもお訪ねしました。まずは、グリーターになった動機です。先にも触れたように、ジュヌヴィエーヴさんはサン・ドニ市に24年間住んでいます。この間、息子2人を育てつつ、街の変化を目の当たりにして来ました。この間、学校の父母プログラムのなかで「自分の街を子どもに説明する」というプログラムに参加する機会があり、これ以降、学校からの依頼で子どもたちに街の歴史を伝えてきており、その延長にこの Parisien d'un Jour があったとのことです。なお、グリーターになるには特別の資格は要求されず、パリやサン・ドニ市の周辺に住んでいること、パリとパリ周辺のことをよく知っていることなどが求められているだけだそうです。また、グリーターとしての登録に先立つ訓練などはなく、申し込みのあとで一度だけ他の人がグリーターを務めるツアーに参加してその様子を見学し、さらに月例会議に出席すればそれだけで可であるとのことです。たくさんの訪問者に自分が長く住んできた街を紹介するのは楽しく、うれしいと、誇らしげに語ってくれました。(ちなみにジュヌヴィエーヴさんの趣味は折り紙で、図書館でワークショップを開くなどの活動もしているとのことです。)



現在のサン・ドニ市の様子。運河周辺では再開発が進められています。

#### 4 おわりに

今回の報告書で紹介した「Parisien d'un Jour (1日パリジャン)」の取り組みは、住民自身が自分の街を訪問者に紹介する取り組みです。

今回のレポート作成では、実際にグリーターとして活躍している方にお会いし、彼女の住む街を案内してもらいました。今回案内してもらったのはパリに隣接していながらガイドブックには載ることのない街ですが、彼女の説明を聞きながら街を歩くことでその歴史や移り変わりがよく理解でき、そのため通常の観光よりもその街に深い親しみを持つことができましたように思われます。また、彼女が街を語る中で彼女自身の街への愛着も感じられ、生活者としてのフランス人に親しみを持つことができました。

一方、視点を変えてボランティアを見つめてみても、この観光ボランティア活動には大きな意義があるように思われます。

自分が住む地域の魅力をより多くの人々に知ってもらいたいという思いは、とても自然なもののように思われます。同時に、訪問者を案内するなかから、新たに自分の住む地域の魅力を発見することも少なくないものと想像されます。この意味では、観光ボランティアは、地域づくりについての相乗効果をもっているはずです。

もちろん、訪ねる側から見ても、それぞれのペースで歩きながらその地域の魅力に触れる際の案内役になってくれる観光ボランティアは非常に有益です。今日、日本各地の観光地や博物館などにおいてボランティアによる案内や解説の取り組みが行われています。日本全国では1600以上、愛知県内だけでも50の観光ボランティア組織があるそうです。皆さんもお出かけの際にはこれらボランティアの方々による観光案内を受けてみてはいかがでしょうか？訪問先をもう一步深く理解でき、またより大きな親しみが感じられることでしょう。